

また、本州についてはプロットが関東および中部地方に集中して打たれているが、そのほとんどが宅地化・埋立て・観光開発・工業排水や生活排水等による水質汚濁その他の原因で失われているのが現状である。

現存すると確認された産地は、静岡県富士宮市と清水町の2か所のみで、水草研究会創立以来新産地の報告は1件もないのが現状である。

そこで、本種を日本から失うようなことがないように天然記念物または特別天然物記念物として指定され、厳重な管理のもとで保存されるよう願ってやまない。

おわりに

日本のヒンジモに関する資料を歴史的に調査し、本種の分布の変遷および現状にふれたが、その保護対策は急を要するものと判断している。特に国立公園指定、ラムサール条約登録湿地として国際的にも地の利を得た釧路湿原のヒンジモその他(カラフトグワイ等)数種を対象とし、水草研究会の名によって天然記念物または、特別天然記念物への指定手続が実現できれば幸いである。

#### ○関 正和『大地の川 甦れ、日本のふるさとの川』(草思社, 1994年10月, 247p, 1600円)

建設省が、従来の河川改修工法から「多自然型川づくり」推進への方針転換を打ち出したのは1990年のことであった。建設省土木研究所にあって、このような大転換に中心的役割を果たしたのが、本書の著者、関正和氏である。ひとりの河川技術者として、世界の川を見、日本の川の歴史を考える中から、今までの河川改修のあり方に疑問をもち、ほんとうの川の姿を求めて苦闘した経緯が本書の内容になっている。私自身は「多自然型川づくり」の現状に疑問をもっており、また、本書の主張にも必ずしも同意できない点がある。しかし、こちらの不勉強を恥じなければならぬ箇所も多々あった。

46才の著者は肺ガンに犯され闘病生活中である。遺稿のつもりで書いたと「あとがき」にある。日本の川のあり方を考えようとする人には必読書である。

#### ○『田手川の生態系調査と多自然型工法』(佐賀県土木部, 1993年8月, 135p)

佐賀県の筑後川水系に属する田手川は、全長20kmあまりの中河川で、おそらく佐賀県以外の方にはほとんど知られていない川だろう。この田手川を多自然型工法で整備するために行なった基礎調査の報告書である。河川整備の準備段階で、これだけの調査が行なわれたことも驚きであるし、構成、内容ともに行政が発行するありきたりの報告書とはひと味違っている。たくさんのカラー写真が盛り込まれた美しい報告書であるが、なにより特記すべきは、内容のすばらしさである。川の自然の本来の姿を明らかにし、それを保全に生かしたいという調査

者の意気込みがひしひしと感じられる。

まず「序説 田手川の概要」がおもしろい。自然環境や水文学的な記述かと思って読み始めると、魚取りの方法や子供たちがこの川でどのようにして遊んだかという人間生活とのかかわりに重点がおかれる。田手川は自然と人間とのやりとりの中でできた「里川」だというのである。

第1章が「調査編」である。昆虫、魚類、鳥類、植物の各論のほかに「5. 動物と共存するための河川および周辺環境—トンボ類を中心に」として、河川の生物たちが利用する多様な自然構成要素を面的に考える必要性を論考している。植物については、河川のさまざまな環境に対応して異なった植物群落が成立していることを例証している。主な種について、生態的特性だけでなく人間生活とのかかわりや方言を紹介しているのもおもしろい。植物目録には71科306種がリストアップされている。

「第2章 理論編—河川デザインに何が必要か—」の結論は「河川整備は、人間も含めた生き物のためにある」ということになろうか。微地形を保存し、また「川の自由」を奪ってはならないという主張である。第3章は、以上の検討を受けた「工法」である。流路、河川敷、魚道などのあり方に検討を加え、整備にあたっての留意点を提言している。

これからの河川整備のあり方を学ぶテキストに推薦したいと思うほどの内容である。この報告書をまとめられた研究者に敬意を表するとともに、その提言が田手川河川整備の現場で生かされることを期待する。

(角野康郎)